

# 教宣 せぶん

## 教宣のチカラ

「せぶん」が100号を迎えることになりました。組合分裂以降、職場や身の回りで起きていることを中心に、感じたことをストレートに書いてきましたが、制度廃止の「通知・提案」が出されてからというもの、発行回数が急増したような気がします。

当時の支部執行部が規約に反して全損保を集団で脱退するという暴挙をとった理由は、「私たちの社員制度を安全にそして確実に、合併新会社本体の社員制度に組み込ませるためには、東海経営が忌み嫌う全損保に所属してられない」というものでした。その大義は、合併後わずか1年余りで消え去り、会社の出してきた制度廃止の通知・提案に早々と調印してしまいました。どこが安全だったのでしょうか？どこが確実だったのでしょうか？そして何を一番大切にしたのでしょうか？

全損保脱退が執行部より提起された時、組織内は揺れに揺れました。いままで同じ目的に向かって運動をすすめてきた仲間がいがみ合い、悪口を言い合い、職場の人間関係もギクシャクしました。全国にいた仲間との交友関係も、所属する組合によって再構築され、一度壊れた交友関係はいまでも元通りになっていません。契約系のほとんどの仲間が、この会社から去って行った現在、いったいあの脱退劇やその方針は何だったのか、とつくづく思います。

過去において、損保社で全損保脱退劇が何度か繰り返されていますが、その後で決まて行われるのが、経営による、従業員に対する一網打尽の合理化です。私たちの脱退劇においても、全損保本部は「脱退した後にあるのは『明るい未来』ではなく『一網打尽の合理化』である」と忠告していました。事をすすめる執行部に「思いとどまるように」と必死に翻意しました。しかし、その思いは通じず、私たちの脱退劇も過去の脱退劇と同じような、いやそれ以上のさみしい結末を迎えることになってしまいました。

バブル全盛時代、「補償機能の発揮」という損保本来の姿から離れ、高利回りの積立商品を乱売し、市場の「マネー」をかき集めようと血眼になっていた損保各社の姿がありました。時代の流れと言わんばかりに、銀行も、証券会社も、生保社も、損保社も「マネー」集めに奔走しました。数年後、バブルがはじけ、多くの金融機関が破綻する結果となったわけですが、その時代に全損保は「マネー集めに執着する損保経営を批判し、損保社の使命は補償機能の発揮である」と主張していました。この「時代の流れ」が間違っていると世論に訴え、流れの行く先を少しでも変えようと地道に運動していました。その一連の全損保の姿・スタンスと、私たちの脱退劇に見るそれとが重なって見えます。構図や源流はまったく同じだと感じます。

当時もいまも私たちが惑わされるのは「時代の流れ」という言葉です。しかし、正しい時代の流れもあれば、誤った時代の流れもあります。時代の流れに身を任せる人はその時代の流れが「正しい」のか「間違っている」のか見極める能力・感覚が足りないのではないのでしょうか。

会社をもっと儲けたいという理由で、従業員の雇用や生活が破壊されても仕方がないなどという「時代の流れ」はバブルより早く崩壊すると確信しますし、それを立証するために、私たちは果敢に、そして旺盛に「たたかい」をすすめていきます。